

直方ミニバスケットボールクラブだより

自分で社会の扉をたたくときがくる

～おめでとう～

10か月間、警察学校で訓練を行い、7月に全課程を修了して、警察署に配属になりました。これからは、現場の警察官として頑張っていきます。（2021年7月13日）

卒部生A君から、うれしい連絡が届きました。無事警察学校を修了し、7月17日から現場警察官としての人生がスタートするとのこと。上記はメール文ですが、直接電話もくれました。最初の1週間が本当に苦しかったそうで、「何度も逃げ帰ろうと思いました」と言っていました。実際その最初の1週間で同期5名が辞めたそうです。その時期に送ってきてくれたメールが以下の文です。

警察学校は、想像以上に厳しくて、正直辞めたいって思ったこと何回もあります。でもミニバスで培った精神力と、弱い「自分に勝つ」という言葉を胸に頑張ってます。ミニバスのみんなの声が、今の自分にほんとうに力になっています。（2020年10月10日）

世代を超えて互いが支え合っていることを本当にうれしく思います。

また、「苦しかった分、いっしょに乗り切った同期との絆は本当に強く太いものになりました」とも語っていました。同じ時代に、同じ場所で、ともに汗を流したなかまとのつながりは、一生ものです。小学校、中学校、高校、大学等、それぞれの段階で、大切ななかまをもつこと、それは人生の財産です。目先のことにとらわれて、人とのつながりをないがしろにしたり、切ってしまうような言動をとったりすることは、その子の人生にとって大きな損失です。私たちおとなの役割は、子どもにとって大切な人とのつながりをいっしょに大切にしていけること。また、子ども自身が大切にしようとしている人とのつながりを切らないことです。

大阪府という都会での警察勤務、さらにコロナ禍という状況での船出で、これまで以上にきびしいこともあると思いますが、がんばってほしいと願うばかりです。直方に帰る機会をなかなか見つけられないようですが、少し落ち着いて、帰る機会をつくることができたら、また寄ってくれると思います。

自分で社会の扉をたたかなければならないときのために...

私にとって、教え子一人ひとりに、人としての成長が垣間見える時が、この上ない喜びです。卒部生が、北小の体育館にもどってきてくれるときがありますが、そのときの、ことばづかいや立ちふるまいの変化だけでも、それを感じさせてくれるときがあります。社会に向けて一步一步成長していったことをうれしく思います。

今がんばっている子どもたちも、遠くない将来、社会の扉をたたくときがきます。時折もどって姿を見せてくれるモデルとなる先輩の姿を見ながら、たくましく育っていってほしいと思います。

中学校も高校も、3年生にとっては最後の大会の真っ最中のようです。すでに地区大会で敗れてしまった子もいるようですし、まだもう一つ上の大会をめざしてがんばっている子もいるようです。しかし、いずれにも、自分で決めたことをがんばり続けたプロセスとがんばりぬいた結果に価値があります。

A君から届いた二つのメールも、入口と出口の状況ですが、その前後にも、途中にも、たくさんの貴重な体験（活動）や出会い、学びやつながりがあつたはず。子どもたちの日常活動にも、同じように、貴重なものが詰め込まれています。結果のいかんにかかわらず、そこを評価してあげることが大切で、そのことが次のステップ（チャレンジ）への意欲につながります。

中学3年、高校3年、大学生4年（短大は2年）の各段階で、それぞれ進学や就職をめざして、次の扉をたたくことになります。その際、そこまでの体験、出会い、学び、つながりなどの財産が、大きな力になります。今の小学生もその力を毎日の活動で蓄えているのです。まさに生き抜いていくための土台づくりをしています。

そうして成長する子どもたちの姿に、私たちおとなも学びながら、ともに成長させてもらっています。

当然のことですが、子どももおとなも、それぞれちがった個性、特性をもち、さまざまな環境、状況のなかで生活しています。約40年間、多くの子どもたちや保護者と出会ってきました。子どもの成長・発達、障がいや病気に関することなどは、私自身知らないことも多く、そのつど勉強です。今なお、学び続けています。それくらい毎年新たな出会いがあるということです。本人や家族にしかわからない大変さや心配事がありながらも、精一杯日々生活を送っている人たちもいます。自分の知っていることだけがすべてではない、知らないことの方が多いということを常に認識しておかなければなりません。

また、心身の成長・発達には個人差もあり、家庭の子育てにおけるしつけやルールにも違いがあります。物事の価値観もそれぞれ違います。昔は「社会常識」ということばがよく使われていましたが、今の時代あまり使われなくなりました。「常識」が本当に正しいか疑わしいこともあるからです。昔は男性の職業とされていた所に今は多くの女性が就業されています。その逆もあります。また生物学的な性のみで「男女」とされていた性別が、今は、性自認や性的指向などの違いから「性は多様である」とされています。障害はその人にあるものではなく、その人を生きづらくしている社会の側にあるとされています。

日本社会も世界的な人権の潮流によって、これまで当たり前とっていたことが当たり前ではないことに気づかされ、少しずつ改善されてきています。テレビやインターネットなどで「SDGs」ということばを聞かれたことがある人も少なくないと思います。日本語では、「持続可能な開発目標」とされています。世界的に取り組むべき17の目標が設定され、今、多くの企業や地域社会で具体的な取り組みが進められています。学校で取り組んでいるところもあります。学校でも、クラブでも、会社でも、「違い」のある多様な人たちが、互いの状況をうけとめたうえで、協力したり助け合ったりしながら、ともに汗を流しています。

スポーツ界も別枠ではありません。SDGsの宣言には、次のように記されています。

スポーツもまた、持続可能な開発における重要な鍵となるものである。我々は、スポーツが寛容性と尊厳を促進することによる、開発および平和への寄与、また、健康、教育、社会包摂的目標への貢献と同様、女性や若者、個人やコミュニティの能力強化に寄与することを認識する。

つまり、スポーツ（バスケット）を通して、「違い」を違いとしてうけとめることのできる寛容性（多様性）と、平和、健康、教育等、人の尊厳を重んじるコミュニティ（共生社会）の実現をめざしていこうとするものです。

子どもが社会の扉をたたくときがくることを想定しながら、ともに汗を流していきたいと思います。

